

1 4. 《土木技術者だった武士》

“さむらい（侍）”や“もののふ（物部）”と違って（注1）、武士は中世になって自警団として登場してきます。

武蔵国では、地元豪族が、灌漑用水を自ら引き墾田を造って私領化していきました。そして、私領地を守るべく武装自警します。これが武士になっていくのですが、そのルーツは、水利技術を持った土木技術者だったといえます。

また地元豪族は、国司の役人や東下りの貴族たちと血縁関係を結び、子孫が増えたと開拓地に分家させ、その姓に開拓地の呼び名を冠しました。（注2）

東国に早く土着したのが、桓武平氏の子孫たちです。そこから、千葉氏、上総氏、秩父氏、河越氏、江戸氏、渋谷氏、鎌倉氏などが分家独立していきました。（注3）

そして平安後期になると、こうした中小武士団は同族的結束を強め、武蔵七党と呼ばれる7グループができていました。武蔵七党の分布を見てみると、武蔵野台地と荒川・利根川低湿地（微高地だった自然堤防周辺を除く）には存在していません。これらの土地を開拓する土木技術がなかったからです。

このように順調に歴史プロセスを歩んでいた東国ですが、その全域の武士勢力図を一変してしまう天変地異が襲うのです。

参考までに、「今昔物語」の武士が開拓者だったと分かる話を紹介します。荒川を隔てて領地を持つ2人の武士が決闘した際、お互いに相手から放たれた矢を刀で打ち落とし勝負が付かず、最後は健闘を称え今後は助け合い地域開発に尽くそうと誓った話です。（注4）

注1：“侍”は、いわば天皇のボディーガード、“もののふ”は、警察軍事を担った物部氏に由来した言葉。

注2：日本の姓の種類が、中国や朝鮮と比較して多いはこのためです。名前についても、通字といって先祖や父親の漢字一字を継承する習わしが広まりました。

注3：これらの桓武平氏は、坂東八平氏といわれ、平将門の叔父である平良文を先祖に持ち

ます。鎌倉幕府成立にあつては、源頼朝を支えました。なお江戸氏は、秩父氏から平安時代の末（11世紀）に別れ、江戸郷を受領して興っています。初代は江戸重継。重継は、江戸の桜田の高台（後の江戸城本丸と二の丸周辺）に居館を構えました。

注4：今昔物語は平安末期に成立。この話は、今昔物語集巻第25第3に集録。決闘したのは、源宛と平良文。源宛は、祖父が「源氏物語」の光源氏の実在モデルとされる源融。平良文は、注3で記した坂東八平氏の祖。

写真は、武蔵七党の分布図（F C 2 ブログ「狭山丘陵の麓で」より）



武蔵七党分布図完

close or Esc Key